



HAL
open science

Allocutivity in Ryukyuan languages

Anton Antonov

► **To cite this version:**

Anton Antonov. Allocutivity in Ryukyuan languages. / / . , , 2016, 978-4-87424-692-4 C3081. hal-01386692

HAL Id: hal-01386692

<https://hal.science/hal-01386692v1>

Submitted on 25 Sep 2018

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

第1章

琉球諸語のアロキュティビティー¹

アントン・アントノフ (INALCO-CRLAO)

1. アロキュティビティーとは何か？

アロキュティビティーという用語は既に十九世紀にフランスの**バスク語**専門家ルイー・ルシアン・ボナパルトによって導入されたものである (Bonaparte 1862:19-21)。**バスク語**のほとんどの方言にある現象で、**聞き手**が親称二人称の代名詞である hi を使って話すべき場合、その**聞き手**が動詞の項でなければ、必ず(叙述文の)すべての定形動詞は、特別な**聞き手活用**をせざるを得ないというのが、アロキュティビティーと呼ばれる現象である。なお、フランスに行われている一部の方言にはその他に敬称二人称 zu を使ってもまた似たような**聞き手活用**が使われている (Hualde and de Urbina 2003:242)。さらに注目すべきことには、この特別な**聞き手活用**の表示は相手が動詞の項である場合の動詞の二人称の表示とは違うのである。

次の例文は**バスク語**の標準語の例である。例(1)は唯一項が一人称の自動詞で、例(2)は動作主が一人称で被動作主が三人称の他動詞である。a は親称を用いないときの用法、b と c は親称を用いて相手が男性か女性かによって使い分けられる。なお、例文に使われた動詞はいわゆる単純形の(助動詞なしで活用変化する)ものである。

- (1) a. Bilbo-ra n-oa
Bilbao-ALL 1u-go

¹ 本稿は筆者が2013年2月に京都大学で開催された国際ワークショップ「琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究」で発表したもの("Verbal allocutivity in Ryukyuan")をもとにしている。その際コメントをくださった方々や本稿執筆にあたり助言をいただいた編集者さんにお礼を述べたい。

「ビルバオへ行く」(親称を用いない場合)

b. Bilbo-ra n-*oa*-k

Bilbao-ALL 1U-go-ALLOC:FAM:M

「ビルバオへ行く」(親称を用いて相手が男性の場合)

c. Bilbo-ra n-*oa*-n

Bilbao-ALL 1U-go-ALLOC:FAM:F

「ビルバオへ行く」(親称を用いて相手が女性の場合)

(2) a. Diru-a da-*kar*-t

money-DET ASP:3P-bring-1A

「お金を持ってくる」(親称を用いない場合)

b. Diru-a za-*karr-e*-a-t

money-DET ASP:3P-bring-e-ALLOC:FAM:M-1A

「お金を持ってくる」(親称を用いて相手が男性の場合)

c. Diru-a za-*karr-e*-na-t

money-DET ASP:3P-bring-e-ALLOC:FAM:F-1A

「お金を持ってくる」(親称を用いて相手が女性の場合)

このように**バスク語**のアロキュティビティーはある条件の下で動詞に項でない相手の標示が現れるものであるので、それを動詞アロキュティビティーと呼ぶことにする。このアロキュティビティーという用語は今まで専ら**バスク語**に応用されてきたものであるが、この現象は決して**バスク語**に限られたものではないように思われる。

バスク語のアロキュティビティーはそもそも話し手と相手の間に存在する関係が文法的に現れているに過ぎない。そして方言によって、それは親しい間柄でも敬遠の間柄でもありうる (de Rijk 1998)。文法化の度合いや個々の用法に違いがあるものの、似たような現象が世界の各地の言語にも見られる (詳しくは Antonov 2015 参照)。孤立語の**ブメ語** (ベネズエラ、Mosonyi and Garcia 2000) と**ナンビクアラ語** (ブラジル、Kroeker 2001)、スー語族の**マンダン語** (Kennard 1936)、アフロ・アジア語族の**ベジャ語** (Appleyard 2004, 2007) もさることながら、日本語と韓国・朝鮮語 (以後、韓国語と呼ぶ) にもアロキュティビティーによく似ている現象があるように思われる。たとえば、日本語のマス形は**バスク語**の敬称**聞き手活用**とほぼ同様なものである。丁寧体とも呼ばれるマス形を使った文体は事実上**非項**(疑

問文の場合を除く)の相手の存在と話し手とその相手の間に存在している関係を述語に標示しているのである。なお、常にマス形を取っている **丁寧動詞** は聞き手がその項になれない点で **バスク語の聞き手活用** の動詞と変わらない。

表 1: 標準語の **丁寧動詞**

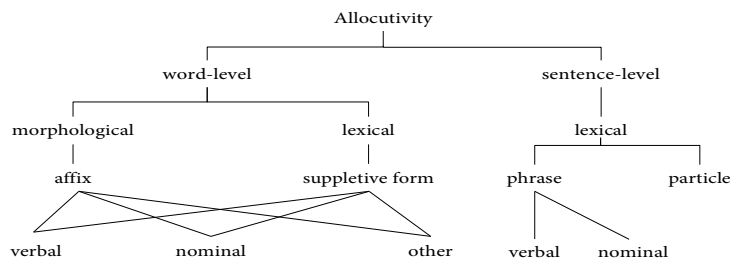
-de goza-imas-
 -(de) or-imas-
 moos(h)-imas-
 itas(h)-imas-
 mair-imas-

1.1 アロキュティビティーの標示について

標示されている場所によって語レベルのアロキュティビティーと文レベルのアロキュティビティーとが区別できる。

前者には形態的なもの (**バスク語**、**ベジャ語**、**マンダン語**、日本語など) と語彙的なもの (ジャワ語など) とがある。後者には主に終助詞によるもの - ビルマ語 (Wheatley 2003:202)、タイ語 (Diller 2008:47)、ベトナム語 (Thompson 1987:260 や Panfilov 1993:264-287 など) がある。

表 2: アロキュティビティーの標示



1.2 (動詞)アロキュティビティーとは違う現象

動詞アロキュティビティーはまず当然のことながら **聞き手** が動詞の項 (主語や目

的語など)である場合を含まない。**聞き手**が項かどうか、はっきりとしているケースとそうでないケースがある。日本語や韓国語 (Sohn 1999:407ff) やチベット語 (Tournadre and Dorje 1998:439-43) のような言語の敬語システムの場合は、**尊敬語**と**謙讓語**の二種類の動詞が存在しているが、**尊敬語**は主語、**謙讓語**は主語以外の項が尊敬の対象になるわけですが、**聞き手**を尊敬の対象にする場合は、それらを項位置に置かなければならない。したがって、**聞き手**がその動詞の項(主語か目的語など)であるのでそれはアロキュティビティーとは呼ばない。このようなシステムは東アジアの各地の他に、ポナベ語にもあり (Rehg and Sohl 1981:359ff)、ポナベ語にはそのほかに尊敬・謙讓助数詞もあるが、いずれもアロキュティビティーではない。また、動詞の命令形が**聞き手**の性別によって使い分けられる語形を持っている言語もあるが、この場合も**聞き手**が命令形の動詞の主語にあたるので、アロキュティビティーの一例として認定できない。

なお、**聞き手**が**非項**でも動詞以外に標示されるような場合も含まない。例えば、日本語の丁寧語や丁寧語には少数ではあるが、名詞(「お花」「拙宅」など)、副詞(「もはや」など)が存在するが、これらは動詞アロキュティビティーと見ない。さらに、複雑なスピーチレベルの敬語システムを有するオーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派のジャワ語 (Poedjosoedarmo 1968、1969、Geertz 1976、Wolff and Poedjosoedarmo 1982)、スンダ語、マドゥラ語 (Stevens 1965) などのスピーチレベル別に話し手と**非項**の相手との関係性をエンコードする非動詞のものも動詞アロキュティビティーと見ない。ビルマ語 (Wheatley 2003:202) やタイ語 (Diller 2008:47) のように終助詞によって相手への敬意を表すケースも同様である。

最後に、動詞に**非項**の**聞き手**ではなく、**非項**の話し手(の性)を標示する対照的な現象があるが、それを仮に動詞反アロキュティビティーと呼んで、動詞アロキュティビティーと見ない。例えば、スー語族のラコタ語では必須ではないが定形動詞は終助詞を伴って話し手の性(正しくはジェンダー)を標示することがある (Trechter 1995, Mithun 1999)。また、ビルマ語やタイ語に存在する、**聞き手**への敬意とつながっている、非動詞アロキュティビティーの一種である終助詞も話し手の性(ジェンダー)をも標示する点でこれに似ている。これらも動詞アロキュティビティーには含まない。

さて、以上のようなケースを考慮に入れず、本稿では琉球諸語における専ら動詞アロキュティビティーの共時的且つ通時的な概観を試みる。

2. 琉球諸語における動詞アロキュティビティー

動詞アロキュティビティーの存在は沖縄の古語や現代の北琉球の方言の描写には丁寧語としてではあるが、わずかながら記述されている。

2.1 現代琉球諸語における動詞アロキュティビティー

動詞アロキュティビティーは専ら奄美や沖縄諸方言に存在するようである(上村 1997:347, 島袋 1997:361, 津波古 1997:381, 須山 1997:452)。八重山方言には存在するかどうか判断しがたい(石垣方言には狩俣 1997:407と宮良 1995:236-243によれば存在するが、宮城 2003a,b と前新 2011はそれに言及していない)。例文はすべて各々の著者の表記を用いている。

2.1.1 奄美方言

奄美方言の動詞アロキュティビティーの接尾辞は以下の通りである(内間・野原 1976、内間 1984、寺師 1985、平山 1986、菊・高橋2005、Niinaga 2010 と重野 2010a,b)。

表 3: 奄美方言の動詞アロキュティビティー

大島	浦	-jor-
	名瀬	-jo:r-
	湯湾	-jawor-
		-jo:r-
	古仁屋	-jo:r-
		-jawor-

喜界島	志戸桶	-e:r-
	荒木	-e:r-
徳之島	浅間	-e:r-
	井之川	-je:r-
	亀津	-je:r-
沖永良部島	畔布	-jabir-
	和泊	-jabir-
	具志堅	-jabir-
	田皆	-jabir-
	知名	-jabir-
与論島	茶花	-jabir-

上記の参考文献に挙げられた例文を以下に示す。

大島浦方言

浦方言には *-jor-* という標準語のマス形にほぼ同類の接尾辞がある(重野 2010a:284-5)。しかし、この形式は、マス形とは違って、尊敬すべき主語のある動詞に直接付けず、動詞の尊敬の形に付く。

(3) *basu=nu k-jo-ta*

バス =NOM 来る -ALLOC-PRF

バスが来ました。

(4) *?amu=nu fur-jor-i*

雨 =NOM 降る -ALLOC-FIN

雨が降っています。

(5) *hon darjor-i*

本 COP:ALLOC-FIN

本です。

(6) *wan=ja ?aQsja gaQkoo=ccji ?i-jor-i*

1SG=TOP 明日 学校=ALL 行く -ALLOC-FIN

私はあした学校へ行きます。

(7) *sensee=nu gaQkoo=ccji ?imor-jor-i*

先生 =NOM 学校 =ALL 行く :HON-ALLOC-FIN

先生は明日学校へ行きます。

大島名瀬方言

名瀬方言では *-jo:r-* という接尾辞を使って動詞の丁寧体ができるという(寺師 1985:131,187)。

(8) a. *jum-jo:-N*

読む -ALLOC-FIN

(私・貴方・彼が)読みます。

b. *jum-jo:r-aN*

読む -ALLOC-NEG

(私・貴方・彼が)読みません。

助動詞 ar-(ある) を使って形容詞の丁寧体も成り立つ。

(9) a. ha:sa (a)r-jo:-N

赤い ある -ALLOC-FIN

赤いです。

b. ha:sa (a)r-jo:r-aN

赤い ある -ALLOC-NEG

赤くないです。

大島古仁屋方言

(10) arja kak-jawom

彼 .TOP 書く -ALLOC.FIN

彼が書いている。(内間 [1984:634])

(11) arja kuša tutur-jawor

彼 .TOP 草 取る -ALLOC

彼が草を刈っている。(内間 1984:634)

大島湯湾方言

(12) waN-ga ik-jawoN

1SG-NOM 行く -ALLOC.FIN

私が行きます。(内間 1984:635-6)

(13) an kii=ja taasa-joo-i

DEM 木 =TOP 高い -ALLOC-NPST

あの木が高いです。(Niinaga 2010:71)

喜界島志戸桶方言

(14) wa-ŋa kʔi-je:N
1SG-NOM 着る -ALLOC.FIN
私が着ます。(内間 1984:641)

(15) wa-ŋa jum-e:N
1SG-NOM 読む -ALLOC.FIN
私が読みます。(内間 1984:641)

修飾節にも表れる。

(16) kʔi-je:N tʃʔ u
着る -ALLOC.ADN 人
着ている人(内間 1984:641)

(17) kʔ i-je: so:
着る -ALLOC.? NMLZ.TOP
着ていること(内間 1984:641)

徳之島井之川方言

(18) waN-ga jum-erUN
1SG-NOM 読む -ALLOC.FIN
私が読みます。(内間 1984:646)

(19) waN-ga kʔir-erUN
1SG-NOM 着る -ALLOC.FIN
私が着ます。(内間 [1984:646])

徳之島亀津方言

(20) wan-ja ik-er-aN da
1SG-TOP 行く -ALLOC-NEG EXCL
私は行きませんよ。(平山 1986:944)

(21) waa-ga jum-er-un da
1SG-NOM 読む -ALLOC-FIN EXCL
私が読みますよ。(平山 1986:944)

(22) ?ama-ja ?atʃa:t-er-un da
あそこ -NOM 暑い -ALLOC-FIN EXCL
あそこは暑いですよ。(平山 1986:944)

沖永良部島和泊方言

(23) wa:-ga: itʃabuN
1SG-NOM 行く .ALLOC.FIN
私が行きます。(平山 1986:868)

(24) wa:-ga: jum-jabuN
1SG-NOM 読む -ALLOC.FIN
私が読みます。(平山 1986:868)

沖永良部島田皆方言

(25) wa:-ga hakkjabuN
1SG-NOM 書く .ALLOC.FIN
私を書きます。(内間 [1984:652])

従属節や修飾節にも表れる。

(26) hakkjabu-ti
書く .ALLOC.?-CNV
書いて(書きまして) (内間 [1984:652])

(27) hakkjabunu tʃʔ u
書く .ALLOC.ADN 人
書く人 (内間 [1984:652])

(28) hakkjabu ʃi ja
書く .ALLOC.ADN NMLZ TOP
(だれかが)書いているの・ことは

沖永良部島知名方言

(29) wa:-ga hak-jabur-a
1SG-NOM 書く -ALLOC.NPST-HORT
私を書きましょう。(平山 1986:904)

従属節や修飾節にも表れる。

(30) hakkjabunu tʃʔ u:=wa taru diro ka ja:
書く .ALLOC.ADN 人=TOP 誰 COP INTER PRT
書いている人は誰かな?

(31) hakkjabutimu wakajaburan dja:
書く .ALLOC.CONCESS 分かる .ALLOC.NEG EXCL
書いても分かりませんよ。

与論島方言

与論島方言は -jabir- 接尾辞を使う。菊・高橋 (2005:787-8) に挙げられている

例文のほとんどが聞き手が動詞の主語であるが、そうでないときも使われるようで、標準語のマス形と似ている。

(32) aQcja: sikama tacjabjuN
明日 朝 leave.ALLOC.FIN
明日の朝、出発します。

(33) na:ja kacja:bjū:siga tusja: kacjabirannu
名前 .TOP 書く .ALLOC.NMLZ.ADV 年 .TOP 書く .ALLOC.PRF.NEG.FIN
名前は書いてありますが、年齢は書いてありません。

重野(2010b:14-15)の例文には三人称で且つ話し手の身内が主語であるものがある。

(34) wutturu=ga gakoo=kati ik-jaabju-i
弟 =NOM 学校 =ALL 行く -ALLOC-NPST
弟が学校へ行きます。

2.1.2 沖縄方言

沖縄方言のアロキュティブ活用は -(j)a(:)bi(:)-という接尾辞を用いる(内間・野原 1976, 内間 1984, 平山 1986, 生塩1999, 伊是名島方言辞典 2004)。

本部町並里方言

(35) dʒi: kakabiN
character write.ALLOC.FIN
書きます。(内間 1984:664)

(36) haki-jabir-aba
書く -ALLOC-HYP

書けば
(37) haki-jabi-ti hara
書く -ALLOC-CNV から
書いてから

(38) haki-jabinu tfu:
書く -ALLOC.ADN 人
書く人

首里方言

(39) maa-nkai-N ?ic-abir-an
どこ -ALL-FOC 行く -ALLOC-NEG.FIN
どこへも行きません。(OGJ 2001 [1963]:23)

(40) cura-winagu tuzi sjo:ru ccu-nu u-ibi:-tan
綺麗 -女 妻 する .PROG.ADN 人 -NOM いる -ALLOC-PST.FIN
美しい妻を持っている男がいました。(OGJ 2001 [1963]:23)

(41) ?asan banun caa siwai bike:i sjooibi:-tan
朝.FOC 晩.FOC always 心配 ばかり する .ALLOC.PROG-PST
いつも心配ばかりしていました。(OGJ 2001 [1963]:24)

形容詞にも続くことができる。

(42) kunu tuzee curasaibi:-ta-si-ga
この 妻 .TOP 綺麗 .ALLOC-PST-NMLZ-CONJ
その妻は美しかったです...(OGJ 2001 [1963]:24)

豊見城西銘方言

(43) wa:-ga t?i-jabin

1SG-NOM 着る -ALLOC.FIN
私が着ます。(内間 1984:674)

2.1.3 宮古方言

宮古方言にはアロキュティビティーがないのが定説のようである(仲宗根 1987 [1976]:233、Hayashi 2010、Pellard 2010 と Pellard 2012(私信))。

西岡(2010:206-7)は野原方言のビヤー(ヤー)(標準語の「~かな」に相当)がもともとは丁寧の意を持っていた可能性があるとしているが、これは実は Yogi (1934:75)が挙げる宮古方言の日本語訳に使われているマス形によるもので、認めがたい。

なお、西岡(2010:208)宮古方言の民謡に現れるサマーズ(「する」の尊敬語、「なさる」とンミヤーズ(「行く・来る」の尊敬語、「いらっしゃる」)の二つの例が丁寧語(アロキュティブ形)として使われている説を提唱しているが、野原方言の話者の賛成を得られないという。

(44) yu-ya aki do samasu oya yo
夜-TOP 夜明け .CNV FOC する :HON お父さん EXCL
お父さんヨ、もうすぐ夜明けです。

(45) mii-dusu-nu mmjatarjaa
新しい -年 -NOM 来る :HON:CNV
新しい年が来たら

尊敬動詞から丁寧動詞が発達するのは珍しくないが(表4参照)、宮古方言はその道を辿って来なかったようである。

2.1.4 八重山方言

宮城(2003a,b)によると、石垣方言の ?o:ruŋ は尊敬語の動詞と助動詞として使われているという。

- (46) me:da ʔo:r-an-u
 まだ 行く・来る :HON-NEG-IMPRF
 まだいらつしやらない。(宮城 2003a:187)
- (47) dʒin-ja taka:nij ar-oor-uŋ
 お金 -TOP たくさん ある -HON-IMPRF
 お金がたくさんおありだ。(宮城 2003b:55)

しかし、宮良(1995:236-7)と狩俣(1997:407)によれば、次の例のように丁寧形(アロキュティブ形)としての用法もあると主張している。

- (48) ɕibatʃi-nanɡa pī-ya ar-oor-un neera
 火鉢-LOC 火 -TOP ある -ALLOC-IMPRF INTER:ALLOC
 火鉢に火がありますか。

動詞アロキュティブティーではないのでここで取り上げないが、宮良(1995)も宮城(2003a)もユーという丁寧の意を添える終助詞の存在に言及する。この終助詞は竹富方言(前新2011:36)や波照間方言(Aso2010:209)にもある。

2.2 動詞アロキュティブティーの通時的考察と文法化

沖永良部島、与論島と沖縄方言の三方言のアロキュティブ接尾辞 -(j)abi(r)-は中古語の丁重(助)動詞ハベリに由来する。

- (49) midukara pa nifon-no fito n-ite nan faber-isi
 I TOP 日本 -GEN 人 COP-SEQ FOC だ :ALLOC:RSP:PST:ADN
 私は日本人でした。(HM I:165.10-11)
- (50) sono noti namu kado firo-ku mo nar-i-faber-u
 DEM 後 FOC 門 広い -CNV FOC なる -CNV-AUX:ALLOC:RSP-FIN
 その後、家の門が広くなりました。(TM 32.3)
- (51) nandeu sar-u koto ka s-i-faber-an

なぜ そんな -ADN こと INTER する -CNV-AUX:ALLOC:RSP-HYP:ADN
なぜそんなことをしましょうか。 (TM 32.4)

この動詞は既に上代語に現れるが、丁寧・**丁重動詞**どころか、その時代はまだ**謙讓動詞**として使われていたかどうかさえ明確ではないようである。

(52) Nakamaro₂- i TADASI-KI OMI₁ tosite PABE₁R-I-t-U
仲麻呂 -NOM 忠実 -ADN 臣 として 仕える :HUM-CNV-PRF-FIN
仲麻呂は忠実な臣として奉行した。 (SM 34)

琉球諸語に初めて現れるのは十五世紀の申叔舟著の**海東諸国記**で、十六世紀の**おもろさうし**(OS)には丁寧用法もある**謙讓助動詞**として使われている(仲宗根 1987 [1976]:233)。OS には勧誘形しか現れない(外間・西郷 1976 [1972]:523, 高橋 1991:295, 431)。

(53) wezoniya=no uchi=ya amahe-yaber-a
えぞ祖 =GEN 家 =TOP 喜ぶ -CNV-AUX:ALLOC-HORT
hokor-i-yaber-a
喜ぶ -CNV-AUX:ALLOC-HORT

えぞ祖の家で喜び祝福しましょう (OS 5-78 [289], 外間・西郷 1976 [1972]:108, 外間・波照間 2002:209)

(54) dashima mabur-i-yaber-a
大島 守る -CNV-AUX:ALLOC-HORT
我が島を守りましょう! (OS [362], 外間・西郷 1976 [1972]:138、外間・波照間 2002:249)

(55) suhe=no china ut-i-yaber-a
強い=GEN 綱 打つ -CNV-AUX:ALLOC-HORT
強い綱を作りましょう (OS [402], 外間・西郷 1976 [1972]:154,

- 外間・波照間 2002:270)
- (56) omoro-tane ko-yaber-a
 すばらしい - 種 乞う -CNV-AUX:ALLOC-HORT
 すばらしい種を乞いましょう (OS [404], 外間・西郷 1976[1972]:154,
 外間・波照間 2002:271)

-yaber- のアロキュティブ用法は**琉歌**に明確に現れる。スルを例にとると、勧誘形(シャピラ)の他には、非過去形の連体形(シャビル)や過去形(シャピタン)、疑問形(シャピガ)などが現れる(外間 1997 と西岡 1994)。

一方、奄美大島のアロキュティブ形の由来は、重野(2010b:286)によると、**尊敬動詞**オワル(中古語のオワスと同根、迫野 2005:4-8)に遡るといふ。このオワルは石垣・竹富方言の**尊敬動詞** ʔo:ruŋ の祖形でもある。

ちなみに、仲宗根(1987[1976]:231)はこのオワルが十五世紀のおもろさうしに**尊敬動詞**としてしか使われていないのに、十八世紀の**組踊り**には自分の行動について話すとき(自尊動詞?)と目下の相手に命令するときに使われるようになっていると主張する。

- (58) diyo:tʃar-u munu=ja
 出る .CNV.ALLOC-ADN 者=TOP
 出て来た者は(=私)(組踊り)
- (59) saki=yu saki=yu daʃo:r-i daʃo:r-i
 酒=ACC 酒=ACC 出す .HON?-IMP 出す .HON?-IMP
 お酒を出して(ゴサマルティチウチ)

データを西岡(2003:64)から引用している重野(2010b:14)も指摘するように、**組踊り**におけるオワル助動詞の用例はほとんど全部(37例のうち33例)が目下への命令である。つまり、ここで定義したアロキュティブの例とは認められない。

この分布は西岡(2004)にも確認されている。ということで、**尊敬動詞**から丁寧・**丁重(アロキュティブ)動詞**への変遷は例(58)、土族系の組踊の担い手の初登場の際の自己紹介のセリフから始まったとしか考えられないように見える。再分析の

元となりうる用例が少ないものの、北琉球の現代のアロキュティブ形がオワルに遡ることは明らかであり、このような再分析は日本語の歴史にも行われたことがある (Antonov 2013)。中世語のオヂャルとオリャルもさることながら (Frellesvig 2010:372-3)、現代語のゴザルも実はもともとは**尊敬動詞**のオワシマス(＜オワス+尊敬助動詞イマス)を記す漢字＜御座＞の音読み＜ゴザ＞に＜アル＞を添えたものに由来する(鈴木 1997:187)。

OJ	EMJ1	EMJ2	LMJ1	LMJ2	EModJ	ModJ
		(-) <i>faber-</i>	(-) <i>sauraw-</i>	- <i>soo(rɔɔ)</i>	-(<i>i</i>) <i>ma[ra]se-</i>	- <i>imas-</i>
				odyar-		-(de) goza-imas-
				oryar-		-(<i>de</i>) <i>or-imas-</i>
						<i>moos(h)-imas-</i>
						<i>itas(h)-imas-</i>
						<i>mair-imas-</i>

表 4 日本語の動詞アロキュティブティー形の変遷

一方、重野 (2010b:12) によれば、**喜界島や徳之島方言**のアロキュティブの接尾辞は、主動詞の連用形に助動詞アリを添えてできたものと見ている。これは仲宗根 (1987 [1976]:226) が**首里方言**の**尊敬動詞** ?menseN がもともとは $\text{imi+ari} > \text{imeen}$ に $\text{meshi+ari} > \text{miseN}$ の加わった複合形である説を踏まえたものである。正しいかはさておき、この説の論理は、中世語に主動詞の連用形にオ・ゴを接頭し、アリ・アルを接尾して生産的な**尊敬動詞**のパターンを見ても納得できるように思われる(鈴木 1997:187)。

3. 統語論から見た琉球諸語における動詞アロキュティブティー

3.1 アロキュティブティーと人称

表 5 は本章で概観した琉球言語のアロキュティブ形式がどんな動作主＞被動作主(主語＞対象)の場合に使用できるのかをまとめてみたものである。データが不十分なため、**聞き手が非項**であるすべてのケースに使えるかどうかは言い難い。

	浦	名瀬	湯湾	古仁屋	志戸桶	井之川	田皆	与論	並里	首里
1	✓	?	✓	?	✓?	✓?	✓?	✓?	✓?	✓
2	?	?	?	?	?	?	?	✓	?	✓?
3	✓	✓	✓?	?	?	?	✓?	✓?	✓?	✓
1>2	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
2>1	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
1>3	?	✓?	?	?	✓	✓	✓	✓?	✓?	✓
3>1	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
2>3	?	✓?	?	?	?	?	✓?	✓?	✓?	✓?
3>2	?	?	?	?	?	?	?	?	?	✓?
3>3	?	✓?	?	✓	✓	✓	✓	✓?	✓?	✓?

表 5 動詞アロキユティビティーと人称

3.2 アロキユティビティーと文節タイプ

表 6 はアロキユティビティーとあらゆる文節タイプとの互換性を示そうとしているが、データがやはり十分ではないので、不明な点が数多くある。にもかかわらず、標準語とは違って従属節で使われる言語が琉球諸語にあることは明らかである。それは**バスク語**の標準語とは違う点でもあるが、実は**バスク語**の方言となると、日本語と琉球諸語のように疑問文でも従属節でもアロキユティブ形式が現れることがある(de Rijk 2008:810, Adaskina and Grashchenkov 2009)。

	浦	名瀬	湯湾	古仁屋	志戸桶	井之川	田皆	与論	並里	首里
叙述	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
疑問	?	?	?	?	?	?	?	✓	?	✓?
感嘆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
命令	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
従属	?	?	?	?	✓	?	✓	✓	✓	✓

表 6 動詞アロキユティビティーと文節タイプ

4. まとめ

この記事では公開された言語記述や文法に基づいて琉球諸語に存在する動詞アロキュティビティー(従来の**丁寧・丁寧語**)のあらゆる接尾辞を概観してその由来や変遷について論じることを目的とした。しかし、記述が不十分であり、形態の面にしか言及しないものが大部分であり、詳しいことが分からない言語がまだたくさんある。それに、統語の面に言及しないとその接尾辞の使い方が標準語のマス形と同類であることを含意しているように思われる。

しかし、これは正しくない。場合によってはある形式がアロキュティブか尊敬形か定かではないこともある。それは例えば挙げられた唯一の用例が**聞き手**を主語とした疑問文の場合である。標準語のアロキュティブ形もそのような用法があるとはいえ、記述が不十分な言語の場合はその形式が**聞き手**が**非項**でも使えるかどうかをそれだけでは判断しがたいのである。

動詞アロキュティビティーは世界の言語には滅多に見られない現象である。それが故、琉球諸言語におけるアロキュティビティーの記述はできるだけ詳細なものにしたい。表6に記載してあるシナリオの全部で使えるかどうかを自動詞と他動詞を使ってちゃんと確認し、**聞き手**が**非項**の場合でも使えるならアロキュティブ形と見做せばよい。そのため、疑問文ではなくて、**聞き手**が動詞の項ではない叙述文(1>3, 3>1, 3>3)で、尊敬や謙譲の用法の可能性のないようなシナリオで調査してみたい。自動詞で主語が一人称か尊敬の対象となれない三人称(例えば、弟や主語が所有していない無生物)が最適のように思われる。最後ではあるが、主節だけではなく、あらゆる従属節においても使用できるかどうかを調査して明記したい。

言語

EMJ	Early Middle Japanese 中古語 (800-1200) (EMJ1: 9c-11c/EMJ2: 11c-12c)
EModJ	Early Modern Japanese 近代語 (1600-1750)
LMJ	Late Middle Japanese 中世語 (1200-1600) (LMJ1: 12c-14c/LMJ2: 14c-16c)
ModJ	Modern Japanese 現代語 (1750-)
(W)OJ	(Western) Old Japanese 上代中央語(700-800)

文献

HM	浜松中納言物語 (1064?)
OS	おもろさうし (16 世紀)
SM	宣命 (7-8 世紀)
TM	竹取物語 (9-10 世紀)

参照文献

- Adaskina, Yulia and Pavel Grashchenkov (2009) Verb Morphology and Clause Structure in Basque : Allocutive. Presentation at *Morphology of the World's Languages*, University of Leipzig, 11-13 June 2009.
- Aikhenvald, Alexandra (2010) *Imperatives and Commands*. Oxford: Oxford University Press.
- Alberdi, Javier (1995) The development of the Basque system of terms of address and the allocutive conjugation. In: José Ignacio Hualde, Joseba A. Lakarra and Robert Lawrence Trask (eds.) *Towards a history of the Basque language*, 275–295. Amsterdam: John Benjamins.
- Antonov, Anton (2013) Grammaticalization of allocutivity markers in Japanese and Korean in a cross-linguistic perspective. In: Martine Robbeets and Hubert Cuyckens (eds.) *Shared Grammaticalization with special focus on the Transeurasian languages*, 317-340. Amsterdam: John Benjamins.

- Antonov, Anton (2015) Verbal allocutivity in a crosslinguistic perspective. *Linguistic typology*, 19(1):1-43.
- Appleyard, David (2004) Beja as a Cushitic Language. In: Gábor Takács (ed.) *Egyptian and Semito-Hamitic (Afro-Asiatic) Studies: in memoriam W. Vycichl, Studies in Semitic Languages and Linguistics*, vol. 39, 175-195. Amsterdam: Brill.
- Appleyard, David (2007) Beja Morphology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Morphologies of Asia and Africa*, vol. 1, 447-481. Indiana: Eisenbrauns.
- Aso, Reiko (2010) Hateruma (Yaeyama Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 189-227. Tokyo: RILCAA.
- Bonaparte, Louis-Lucien (1862) *Langue basque et langues finnoises*. London: Strangeways & Walden.
- Diller, Anthony (2008) Resources for Thai Language Research. In: Anthony V. N. Diller, Jerold A. Edmondson and Yongxian Luo (eds.) *The Tai-Kadai Languages*, 46-48. London and New York: Routledge.
- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geertz, Clifford (1976) The Background and General Dimensions of Prijaji Belief and Etiquette. In: *The Religion of Java*, 248-260. Chicago: University of Chicago Press.
- Hayashi, Yuka (2010) Ikema (Miyako Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 167-188. Tokyo: RILCAA.
- 平山輝男 (1986) 『奄美方言基礎語彙の研究』 東京：角川書店。
- 外間守善 (1997) 「琉歌百控」 友久武文・山内洋一郎・真鍋昌弘・森山弘毅・井出幸男・外間守善 (校注) 『田植草紙・山家鳥虫歌・鄙廼一曲・琉歌百控』(新日本古典文学大系) 東京：岩波書店。
- 外間守善・波照間永吉 (2002) 『定本おもろさうし』 東京：角川書店。
- 外間守善・西郷信綱 (1976 [1972]) 『おもろさうし』 東京：岩波書店。
- Hualde, José Ignacio and Jon Ortiz de Urbina (eds.) (2003) *A Grammar of Basque*. Berlin: Mouton de Gruyter.

- 伊是名島方言辞典編集委員会 (2004) 『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会.
- 亀井孝・河野六郎・千野 栄一(編) (1997) 『日本列島の言語』東京：三省堂.
- 狩俣茂久 (1997a) 「琉球列島の言語-宮古方言」亀井孝・河野六郎・千野 栄一 (1997), 388-403. 東京：三省堂.
- 狩俣茂久 (1997b) 「琉球列島の言語-八重山方言」亀井孝・河野六郎・千野 栄一 (1997), 403-413. 東京：三省堂.
- Kennard, Edward (1936) Mandan grammar. *International Journal of American Linguistics*, 9, 1-43.
- 菊千代、高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』東京：武蔵野書院
- Kroeker, Menno (2001) A Descriptive Grammar of Nambikuara. *International Journal of American Linguistics* 67:1-87.
- 前新透 (2011) 『竹富方言辞典』石垣：南山舎.
- Matayoshi, Satomi (2010) Tsuken (Okinawan). In: Shimoji and Pellard (2010), 89-111. Tokyo: RILCAA.
- 間宮厚司 (2005) 『おもろさうしの言語』東京：笠間書院.
- Mithun, Marianne (1999) *The Languages of Native North America*. Cambridge University Press.
- 宮城信勇 (2003a) 『石垣方言辞典』那覇：沖縄タイムズ.
- 宮城信勇 (2003b) 『石垣方言辞典：文法、索引編』那覇：沖縄タイムズ.
- 宮良信詳 (1995) 『南琉球八重山石垣方言の文法』東京：くろしお出版.
- 森山由紀子 (2007) 「文法化観点から見た日本語敬語形式の通時的変遷試論」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』24:67-76.
- Mosonyi, Jorge Carlos, and Jorge Ramón García. 2000. Yaruro (Pumé). In: Esteban Emilio Mosonyi and Jorge Carlos Mosonyi (eds.) *Manual de lenguas indígenas de Venezuela*, vol. 2, 544-593. Caracas: Fundación Bigott.
- 仲宗根政善 (1976) 「宮古および沖縄本島方言の敬語法-『いらっしやる』を中心として-」九学会連合沖縄調査委員会(編)『沖縄自然・文化・社会』491-502. 東京：弘文堂
- Niinaga, Yuto (2010) Yuwan (Amami Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 35-88. Tokyo: RILCAA.

- 『日本国語大辞典』 (2001-2) 第2版. 東京: 小学館.
- 西岡敏 (1994) 「琉歌・組踊り語における動詞の活用表」『沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』 7:39-89.
- 西岡敏 (2003) 「組踊りの謙讓語-現代首里方言との比較を通して」『琉球の方言』 28:53-68.
- 西岡敏 (2004) 「組踊り『万歳敵討』」『沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』 16:229-240.
- 西岡敏 (2010) 「宮古方言における敬語法の記述-旧上野村野原方言の敬語動詞を中心に」 上野善道 (編)『日本語研究の12章』 196-209. 東京: 明治書院.
- OGJ (2001 [1963])『沖縄語辞典』国立国語研究所資料集 5. 東京: 財務省印刷局.
- 沖森卓也(編) (2010) 『日本語史概説』東京: 朝倉書店.
- 上代語辞典編修委員会 (1967)『時代別国語大辞典・上代編』東京: 三省堂.
- 生塩睦子 (1999)『伊江島方言辞典』伊江: 伊江村教育委員会
- 迫野虔徳 (2005) 「おもろさうしのラ行四段動詞オワルの成立」『語文研究』 99:1-11.
- Panfilov, V. S. (1993) *Grammaticeskij stroj v'etnamskogo jazyka*. Saint Petersburg: Saint Petersburg State University.
- Pellard, Thomas (2010b) Ogami (Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 113-166. Tokyo: RILCAA.
- Poedjosoedarmo, Soepomo (1968) Javanese Speech Levels. *Indonesia* 54-81.
- Poedjosoedarmo, Soepomo (1969) Wordlist of Javanese Non-Ngoko Vocabularies. *Indonesia* 165-190.
- Rehg, Kenneth L. and Damian G. Sohl (1981) *Ponapean Reference Grammar*. Hawai'i: Hawai'i University Press.
- de Rijk, Rudolf P. G (1991) Familiarity or solidarity : The pronoun *hi* in Basque. In: *Revista Internacional de los Estudios Vascos* 36(2): 373-378.
- de Rijk, Rudolf P. G. (2008) *Standard Basque : A progressive grammar*. Boston: MIT Press.
- 重野裕美 (2010a) 「奄美大島龍郷町浦方言の敬語法」『広島大学大学院教育学

- 研究科紀要』 59:279–288.
- 重野裕美 (2010b) 「奄美諸島方言の敬語法 : 敬語形式の分布と展開に着目して」『国文学巧』 208:1–18.
- Shigeno, Hiromi (2010c) Ura (Amami Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (2010), 15–34. Tokyo: RILCAA.
- 島袋幸子 (1997) 「琉球列島の言語–沖縄北部方言」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1997), 354–369. 東京: 三省堂.
- 清水彰 (2003-04) 標音おもろさうし注釈. 研究叢書. 大阪: 泉書院.
- Shimoji, Michinori and Thomas Pellard (eds.) (2010) *An Introduction to Ryukyuan Languages*. Tokyo: RILCAA.
- Sohn, Ho-min (1999) *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stevens, Alan M. (1965) Language Levels in Madurese. *Language* 41:294–302.
- 須山奈保子 (1997) 「琉球列島の言語–奄美方言」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1997), 311–354. 東京: 三省堂.
- 鈴木丹次郎 (1997) 「日本語の歴史–敬語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1997), 184–190. 東京: 三省堂.
- 高橋俊三 (1991) 『おもろさうしの動詞の研究』 東京: 武蔵野書院.
- 高橋俊三 (1997a) 「琉球列島の言語–古典琉球語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1997), 422–431. 東京: 三省堂.
- 高橋俊三 (1997b) 「琉球列島の言語–与那国方言」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1997), 413–422. 東京: 三省堂.
- 高山善行・青木博史・福田嘉一郎編 (2010) 『日本語文法史』 東京: ひつじ書房.
- 寺師忠夫 (1985) 『奄美方言その音韻と文法』 那覇: 根元書房.
- Thompson, Laurence C. (1987) *A Vietnamese Reference Grammar*. Number XIII–XIV in *Mon-Khmer Studies*. Hawai'i: University of Hawai'i Press.
- Tournadre, Nicolas and Sangda Dorje (1998) *Manuel de tibétain standard*. Paris: L'Asiathèque.
- Trechter, Sara (1995) *The pragmatic functions of gender deixis in Lakota*. Doctoral Dissertation, University of Kansas: Lawrence.

- 津波古敏子 (1997)「琉球列島の言語-沖縄中南部方言」亀井孝・河野六郎・千野 栄一 (1997), 369-388. 東京：三省堂 .
- 内間直人 (1984) 琉球方言の研究 . 東京：笠間書院 .
- 内間直人・野原三義 (1976)「奄美大島宇検村湯湾方言の文法」『琉球の方言』2.
- 上村幸雄 (1997)「琉球列島の言語-総説」亀井孝・河野六郎・千野 栄一 (1997), 311-354. 東京：三省堂 .
- Vovin, Alexander (2003) *A Reference Grammar of Classical Japanese Prose*. London: Routledge Curzon.
- Vovin, Alexander (2005) *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Part I : Phonology, Script, Lexicon and Nominals*. Kent: Global Oriental.
- Vovin, Alexander (2009a) *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Part II*. Kent: Global Oriental.
- Vovin, Alexander (2009b) *Man'yōshū: a new English translation containing the original text, Kana transliteration, Romanization, glossing and commentary*. Kent: Global Oriental.
- Wheatley, Julian K. (2003) Burmese. In: Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 195-207. London and New York: Routledge.
- Wolff, John U. and Soepomo Poedjosoedarmo (1982) *Communicative Codes in Central Java*. Southeast Asia Program Publications. Ithaca: Cornell University.
- 与儀達敏 (1934)「宮古島方言研究」『方言』 7:49-77.